

「サイエンス科学とテンペラメント気分」

桑木 彥雄

かような表題で今年ロンドン出版の一書、原子物理学新理論の創造者の一人として一九三三年度のノーベル賞を得たシュレーディンガー氏の物理学随筆集である。著者はベルリン大学の教授であったがドイツを去って今牛津大学オックスフォードの教授となつている。この書は新原子論の根本概念、偶然の法則、不決定の原則などについて、専門的でなく書いたものであるが、特に、この新理論の創造者自身が書いたのであるから、第二手セカンド・ハンドでないといふところに価値もある。書中に集めたものの中には既に我国の科学雑誌に邦訳されたものもあるが、この書の題名に相当する科学と気分とに関するような一層一般的な事柄について二、三を次に摘録する。

著者は、ゾラの有名な言葉、芸術は気分を通して見た自然だ、というのを引いて、この言は、芸術が主観的な産物であることを示したのだが、一般に、客観的真理を取扱つていられる科学にもまたこの言があては当嵌まるといふ。いわゆる精神科学たる歴史、社会学、心理学などにおいて、たとえば歴史が単なる記録を超えると学者の主観が入込むことなどいふまでもないが、精密自然科学もまた、人間的主観に支配おさされている。我々の周囲の自然現象の中について何が先ず我々の注意を引くかの可能性は千差万別だから、自らそこおそに選択が行われなければならない。原始人においては生活闘争という人間の要素が即ちその選択標準である。

人類の生活に多少の餘裕の出来た後、またそういう時にはじめて科学が生れるが、そのときに選択された科学が進む方向も、必ずしも論理的系統的に律し得られるものではない。

たとえば実験的研究などについても或は自分の希望が生憎費用のために遂行されなかつたり、或は種々の偶然で実験の結果を逸したり、また恰もその反対の幸運な場合もあり得るし、また何がしかの研究も周囲からは全く無理解、無同情で空しく埋没する場合もあり、或は少数ながら国際的に共鳴者を得て互に成功を注意する場合には国際競技の如き観もあるが、流行外れの、競技は顧みられないと同じことが学術にもあり、学術の進路に自ら時の流行、時代の好尚が反映することなどを、多くの実例にて立証し、全体として蓋然的に進化という大原則を否定しないでも、その個々の発達変遷にはやはり偶然性や不決定性が支配していることを説いている。

以上で大体察せられるように著者の思想はいわゆる実証主義に属する。著者の挙げた同じ学術史上の例から、著言の言葉その儘、主観的な他の見方もあるといえるであろう。この書の序文にラザフォードが恰度そのようなことを述べている。しかしそこにもいわれているように、著者の記述は極めて魅力的であり、この主義の賛同者にもしからざるものにも等しく好個の秋夜の伴侶たるべき一書であろう。

(昭和十一年十月、大阪毎日新聞)

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化には \LaTeX 2 ϵ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。